

20年前の米国図書館で見た ハンゲル資料整備状況と日本での示唆点

花房征夫

(元アジア経済研究所)

1. 基本ハンゲル資料を網羅収集する米議会図書館

20年前の1988年秋、筆者は勤務先アジア経済研究所の指示で、米国の主要図書館がハンゲル資料をどのように収集、整備しているかに関して現地調査を行った。出発日は確かソウル五輪の閉会式前日で、東京から首都ワシントンに直行するANA機内には、ソウルから戻ってきた米国女子テニス選手達が乗り込んで座っていた。この資料調査は私には初訪米なこともあって、米国という国家を強烈に認識させてくれたと同時に、私がアジ研図書館で主要業務にしていた「ハンゲル資料」と「海外地図資料」を世界の中で考えさせてくれる、得難い体験となった。

最初の訪問図書館は議会図書館(LC)であった。そのときコリア・セクションの資料活動を率いていた責任者は楊基白氏で、名刺には博物館の文化財や収蔵品などの専門官を意味する「Curator」と記されていた。議会図書館が楊氏のハンゲル図書の収集力を高く評価し、処遇していることが窺えた。氏は60代半ばにも見えた眼光の鋭い白髪の士で、執務机には韓国書店から送られてきた目録リストが何冊もあった。コリアン・セクションには3、4人の女性図書館員も働いていて、米国留学や国際結婚などで米国籍を取得した韓国系の人々であった。

楊主任との面談は隣接のジャパニーズ・セクションの協力で実現したが、同業者の故か最初から核心的な意見交換ができ、同館所蔵のハンゲル資料の自由閲覧が許された。ハンゲル蔵書数は確か6万冊で、書庫には基本的な韓国ハンゲル資料が網羅的に収集され、永久的所蔵が前提なことも分かった。議会図書館のハンゲル資料収集は韓国政府が様々な形で支援し、このときも寄贈、交換な

どの最新韓国書が積み上がっていた。

このとき楊主任からは足跡も伺った。出身地はピョンヤンで、父は牧師をしながら日本の植民地支配に抵抗し、独立後は金日成政権に追われてソウルに南下したものの報われる日々が少ないので、やがて渡米して議会図書館に奉職と聞いた。議会図書館調査の収穫の一つは、ハンゲル資料の収集ノウハウを学んだことだ。楊主任は適切な収集情報を発信すると、ソウルの図書輸出業者は次々と関連情報を送信してくるので、外国にいるハンデキャップは乗り越えられるとアドバイスされた。

筆者の利用状況の質問には「在米韓国人を除けばそれ程の量ではないが、質的には米国の外交問題、政策立案などにも重なることも多い」と返答された。このことは今夏、日韓領土問題に関わる米国政府作成の「竹島紛争」地域の分類変更問題が議会図書館の発議によって生じたことでも証明出来よう。それから全国的なハンゲル資料の連携、調整、リーダーシップなどでも教えられた。全米各地に散在するハンゲル図書館は最終的には議会図書館が拠り所で、蔵書の相互貸借、ハンゲル文献の所蔵調査、韓国語図書館人材のネットワーク化などの仕事で印象に残った。

2. カーター・J・エッカート先生との出会い

筆者はその後、ニューヨーク公共図書館に出向き、さらにニューヨーク州立大学(アルバニー校)の図書館に移動した。これは同大学経済学部の李(Pong S.Lee)教授の「図書館作業機械化で顕著な業績」があるというアドバイスによって実現した。李教授は朝鮮戦争中にエール大学に留学された方で、アジ研には確か1980年代初に「北朝鮮経済問題で意見交換したい」と現れて、野副

伸一研究員（現亜細亜大学教授）から紹介されて、現在に至る長い交流の始まりになった。

このときアルバニー校までクルマで迎えに来てくれた人物は、本学会の前会長服部民夫先生である。同氏はハーバード燕京研究所のワグナー（Edward Wagner）教授のもとで「朝鮮王朝時代の権力エリート問題」を研究中であった。ハーバード燕京研究所（Harvard Yenching Institute）韓国語図書館の訪問は、カーター・エッカート先生（現ハーバード韓国問題研究所長）からの招待が契機となった。

エッカート先生と筆者の出会いは4半期世紀前の1980年代初めの真夏日まで遡る。そのときのエッカート先生は30代前半の風貌で、まだ珍しかったリュックサック姿で「夏休みを利用して来日」と自己紹介した。名刺にはワシントン大学（シアトル）の博士号候補とあり、晩学の学徒なのかと思った記憶がある。同行者は小林英夫先生（現早稲田大学教授）で、「東京大学図書館などの閲覧指導」を頼まれた。話してみると素晴らしい韓国語能力で、私はそれまで会った西洋人の中で最高クラスであった。質してみると、1970年代半ばに平和部隊の一員として光州に赴任し、在韓歴7、8年と言うので、それなら英語に弱い私も図書館利用程度の案内なら可能と引き受けたのである。

しかしエッカート先生が手に握りしめていたメモには、私も知らない朝鮮総督府「朝鮮産業調査会速記録」などナマの資料名が幾つも書かれ、所蔵先として東大経済学部、社会科学研究所、東洋文化研究所などの名前があった。そこで東大経済学部図書館の知人職員に便宜供与を依頼し、その日は終了した。しかし、翌日もエッカート先生は執務時間前から私を待っていた。現在はどうか知らないが、このとき東大図書館の利用規定には「教授など然るべき人の紹介」の事項があり、この規定を持ち出されて途方にくれて再訪問したと語った。このときエッカート先生は、日本の図書館は「terrible」という言葉を再三、発したので、「アジ研図書館の職員がカーター・エッカー氏を紹介する」などの文章を作成し、持参してもらった。その後も何回か電話が来たが多くは利用手続

きの問題で、そのたび関係者に説明した。

3. 「斉藤実文書」の複製問題

エッカート先生は1年が過ぎた翌年の真夏にも朝早くからアジ研に現れて、執務机の私の横に座っていた。今度は国立国会図書館の憲政資料室の「斉藤実文書」の閲覧で、去年の経験に懲りたのか事前に国会図書館の利用規程を確認し、憲政資料室担当者への連絡を依頼された。それでこの時も電話連絡のほかに「文書」を作成し手渡した。

ところがこの時もトラブルが発生した。資料複製の許諾問題がそれである。エッカート先生が求められた複製は、「高麗大学」「東亜日報」「京城紡績」などの創立者兼湖南財閥の総帥・金性洙が出した総督斉藤実宛への書簡と、もう1つは総督府学務局長・関屋貞三郎に対する私信で、これらの文書は国会図書館では「遺族の複製許諾」を条件にコピーに依っていた。

聞いてみると、斉藤実宛などの文書はエッカート先生が執筆中の博士論文、つまり民族資本「京城紡績（現京紡）」の発展が国策銀行・朝鮮殖産銀行や日本人高官らとの支援や連携によって進展したという論証に関わる核心的資料で、どうしても「複製が不可欠」と訴えられた。当時の筆者にはエッカート先生の学問的な指摘はよく理解出来ない世界であった。しかし問題の私信は筆文なので、「正確な判読にはコピーが不可欠」という話はよく分かった。このときエッカート先生は懐事情も厳しかったようで、航空券が割安チケットなので、日程変更が出来ないなどの窮状を訴えた。

このとき筆者は早急に処理すべき仕事もあったが、エッカート先生の窮状を見かねて、斉藤実と関屋貞三郎の遺族に「複製許諾書」を電話で懇願した。しかし遺族は当初、複製許可には乗り気ではなかった。聞いてみると、韓国学者に認めた複製が当初の説明とは異なって、故人の「誹謗中傷」的な引用が多いとかで、許諾には消極的であった。そこで文書で再度、趣旨を整理して複製許可の依頼文を作成し、「エッカート先生が新進気鋭の篤実な研究者」なことと、コピーの許諾書が1両日内に必要なので早急な「許諾書」を国会図書館に

ファクスでお願いしたい旨を総督齋藤実の遺族に懇願した。もう1人の遺族関屋貞三郎の方にはエッカート先生が訪ねて行く事を条件に「許諾」を取り付けて、依頼文書の他にアドレスを渡して、自宅で「許諾書」を受け取るように指示した。たしか住所は代々木であったが、エッカート先生の訪問は成功して、関屋貞三郎文書の全面的なマイクロ化と、父貞三郎の写真掲載を快諾してくれたのであった。このときは猛暑が続いて、冷房の切れた部屋でランニング姿になって深夜まで文書を作成した記憶がある。いまとなって楽しい思い出になった。

ところで、エッカート先生に対する筆者のオーバー・コミットにも見える関与には、紹介者小林英夫先生（当時駒沢大学助教授）との長い因縁があった。小林先生は院生時代からアジ研図書館に常時、通ってきた研究者であった。しかし筆者が「これは放っておけない」と感じたのは、エッカートさんの窮した中で見せた「真剣さ」であった。彼は困ると、私の出勤前にアジ研に現れて待機し、昼食後でも1時間前に見えて待ったりしていたので、本当に「困窮」していることが分かった。正直に言って、青い目の学者が「大正時代や昭和初期のカナ交じりの文語体資料や手書きの書簡文などを判読できるのか」という疑問はない訳ではなかったが、ここで私が手を離れたら「帰国」、つまり博士論文は相当遅れることになるのかと同情し、「個人的に出来ることならやっつけてあげよう」と決意したのである。

それに私はこの種の性急な資料依頼にはノウハウもあった。この時まで筆者は学者、ジャーナリスト、政府職員、政治家、留学生など1,000人単位の韓国人利用者とアジ研図書館で対応したが、彼らの多くは短時間で資料確保を頼む事が多く、エッカート先生のような相談は異常ケースではなかった。

いつしか時間は過ぎ去って、エッカートさんのことはすっかり忘れていたが、彼の最新消息が、ハーバード燕京研究所への派遣が決まった服部民夫先生を通して知らされた。時期は1987年後半か1988年初めで、エッカート先生が服部先生の師事するエド・ワグナー教授の後任者としてハー

バードの朝鮮史講座を担当するというニュースであった。私の目で放心した表情で懇願した無名の大学院生が、天下のハーバードの朝鮮史講座教授に就任するという話にはわかには信じ難いことであったが、同時に米国大学の人材抜擢のすごさに驚嘆するしかなかった。そんな経緯もあって1988年秋の訪米調査ではエッカート先生に「旧交を温めたい」と連絡したところ、「必ず訪問してくれ」という熱いメッセージが送られてきた。

4. ハーバード韓国語図書館の偉容

そんなことで10月最後の月曜日、燕京研究所の韓国研究所を訪ねたが、大変な歓迎を受けた。午前中は私の訪問目的の韓国語資料の収蔵調査に当て、担当者から米議会図書館の韓国語セクションに匹敵する4万冊もの蔵書などの説明を受けた。分野はワグナー教授の影響なのか歴史資料や族譜書が多かった。燕京研究所の韓国語コレクションの素晴らしさに関して、服部先生はこのとき「キャレル（館内の置机）に籠もっていると毎日、時間がたつのを忘れる」と法悦の趣で語ったことが未だ脳裏に残っている。

ハングル図書業務の責任者は確か金宗河氏であった。身の丈180センチ以上に見えた偉丈夫で、ハーバードのハングル・コレクションを造りあげた大功労者であったが、彼もまた北朝鮮出身者であった。金室長は心臓問題などで引退が決まって、その横にはソウルで挨拶したことがある後任者白麟氏が座っていた。白氏はソウル大学図書館の収集課長で、歴史資料の目利きとして知られていたが、私には「スカウトされて渡米」と語った。そして彼もまた北朝鮮出身の図書館員であった。ハーバードの韓国語図書館の運営資金は多くが韓国政府や関係企業などによって支えられ、図書館業務を韓国最良級の図書館員に全的に任せることで、世界に冠たる韓国語コレクションが維持されていることがよく分かった。

そんな中でエッカート先生からエズラ・ボーゲル教授への挨拶を勧められたので同行すると、「国際的な知的交流で専門的ライブラリアンの果たす役割は大きい。図書館活動は日韓関係におい

でも非常に大事で、今後もしっかり関わって貰いたい」と日本語で激励された。ボーゲル先生は70年代半ばにアジ研図書館を訪問されたことがあり、「誰にでも開かれている日本では珍しいアジア資料の専門図書館」と誉めてくれた記事を残している。

その日の昼食ではワグナー先生、エッカート先生、服部先生それに筆者の4人で楽しい一時を過ごした。レストランはハーバード学長室に隣り合ったフォーマルな店で、美味しいチキン料理が提供された。冒頭、エッカート先生は「このレストランはハーバードの学長用食堂である。外国から見えた学長同様の大事な日本人賓客が本日到着した」と笑わせながら歓迎してくれた。このとき共通語は韓国語で縦横に話題は拡がったが、その間ワグナー先生がしばしば日本語を挟むので質すと、敗戦後の一時期、東京に滞在して朝鮮近世史を勉強して、図書館員では都立大図書館で事務長を務められた桜井義之氏を煩わしたなどと語られた。桜井先生は朝鮮関係書誌では卓越した専門家なので筆者は若いときから同氏の自宅にも出入りした。そんなことで身近な人間関係が国境を越えても繋がっているのに驚いた。

余談だが、桜井先生から蔵書処分を相談されたことがある。しかし桜井コレクションには錦絵など高価資料が多く、アジ研では手が出なかった。しかし放任すれば桜井コレクションがバラバラになるのは目に見えたので、東京経済大学の村上勝彦学長に相談して、結局、東経大図書館が一括購入して「桜井文庫」として保存できた。貴重な錦絵は東経大デジタルアーカイブコレクションの目玉になっている。

5. 日本語版「日本帝国の申し子」に関与

1991年、エッカート先生からインクの匂いが残っているような Carter Eckert, *Offspring of the Empire: The Kochang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism, 1876-1945*, Seattle, Univ. of Washington Press, 1991. の最新豪華書が送られてきた。そして裏表紙には「見ず知らずの私に与えてくれた貢献に感謝する。本書は花房さ

んの協力で出来上がった」など最大級讃辞が書かれていた。序文にも日本での協力パートナーとして筆者の名前が最初に載せられて、「適切な人と機関を紹介した」との文が収録されていた。このとき筆者は「ライブラリアン冥利に尽きる話」と思った記憶がある。

筆者は日本語版翻訳『日本帝国の申し子』の刊行にも関与した。エッカート先生とはその後、ソウルでお会いする機会があり、「日本語版」で相談を受けた。私の英語力では内容把握などは歯が立つものではなかったが、「アジア研究賞」「アジア歴史学会賞」などの権威ある受賞が示しているように、本書は日本植民地統治に関する極めて重要な研究業績であることは理解出来た。また、『朝鮮史研究会論文集第30号:1992年刊』の木村光彦先生（青山大学教授）の書評論文を通して、現在の韓国政治経済問題を解明する上で画期的な文献なことも分かった。しかし日本語版は英語版から10年間ほど待たねばならなかった。

出版企画の推進者は荒木和博氏（拓殖大学教授、特定失踪者問題調査会会長）で、荒木氏に同行して草思社編集者と意見交換すると、筆者がエッカート先生の知り合いなこともプラスになって、意外に早く「日本語版」の刊行が決まった。そして本書の学術性に鑑みて文献紹介も含めて完全翻訳する編集方針が出て、日本語、韓国語の文献チェックは私が担当することになった。こうして筆者は定年退職者の特権を生かして、エッカート先生が訪ねた東大経済学部図書館や国会図書館なども含めて1ヵ月程度、様々な図書館を訪ね歩き、書誌的記録が完璧なことを確認した。このとき、戦後の「歴史観」の転換の中で「ゴミ資料」的な扱いになっていた日本統治末期の資料を何冊か手に取ったが、「研究方法」如何でこうも解釈が異なるものかと驚嘆し、改めて「図書収集の恐ろしさ」を教えて貰った。

こうした経緯をへて2004年初め、草思社から翻訳書『日本帝国の申し子』が出版された。本書は訳者小谷まさ代さんが素晴らしい日本語で日本植民地統治期の真実を描き出し、木村光彦先生がこれまた素晴らしい解説文で協力してくれた。本書は幸いなことにこの種の歴史書では珍しいほど

多彩なメディアに紹介され、反響がきわめて大きかったことを付記したい。

6. 危機的な日本のハンゲル資料整備

翻って、わが国のハンゲル資料整備の現状を述べるが、現在、戦慄すべき危機状況なことを指摘したい。国立国会図書館やNACSIS Webcatなどで主要図書館の所蔵書をデータベースで調べてみると、韓国の話題書や学術書、重要研究機関の最新報告書、領土問題などの最新の日韓関係基本資料などは現在、国立国会図書館なども含めたわが国主要図書館にはほとんど所蔵されていない。現代韓国、朝鮮問題の本格的な研究は、所蔵資料の急速な断絶によって著しく困難になりつつあるということである。したがってハンゲルデータベースの構築は極めて重要な手段になった。しかしこのハンゲルデータベースは技術的には何の問題もないはずなのに、NACSIS Webcatは未だハンゲル検索システムがスムーズには出来ず、説明資料のない状態を続けている。

こうして、現在のわが国ハンゲル資料の情報基盤は停滞から崩壊状況に移行しており、わが国の現代韓国、朝鮮関係研究者などは本誌の特集記事のように、韓国、米国などでの長期滞在は避けられなくなった。筆者が経験した半世紀近い資料活動の中で、現在の現代韓国、朝鮮関係のハンゲル資料環境は最も深刻な状況にあることを指摘したい。

この点でインターネットは大きな情報源であり、個人的には積極的に活用すべきと考えている。しかし拠点図書館までもが安易に韓国のインターネット情報に依存するのは「危険極まりない」というのが筆者の判断である。理由の①は、インターネットに押し寄せているコピーライト権の拡大で、公的図書館などでは現在、インターネット源にもとづく完結した印刷形態の資料提供は出来なくなっている。韓国のインターネット基本政策が変更されれば、わが国で一大情報パニックを引き起こ

す可能性が高い。その意味で複数の拠点図書館は従来通りに基本的なハンゲル書や研究報告書などを活字図書形態で保存し、提供しなければならない。②は、図書館の蔵書収集のテクニカルな問題で、韓国書のように1、2年間で品切れ、廃棄される状況では、後日の収集などは夢の話である。

その意味でアジア地域資料の本格的構築を目的に掲げる国立国会図書館・関西館の「役割と責任」は極めて大きい。米議会図書館のように、同館は日本のハンゲル資料問題を改善、解決、前進させるための「司令塔役割」を発揮しなければならない。

さらに付け加えれば、これまで現代韓国、朝鮮関係研究書のセンター的役割を果たしてきた、アジア研図書館ハンゲル資料部門の立て直しが急務である。問題は資料購入費の急激な減少であるが、破綻財政の国家資金投入などは想定出来なくなったので、前述したハーバード燕京研究所の韓国語図書館のように、外交関係機関や在韓進出企業などの民間部門との協力、提携などが緊要になった。資料購入費として年間4、500万円程度を継続、確保されれば、米国のような国際レベルの図書館運営は可能である。

国家的見地に立った韓国語資料の拠点図書館を首都圏、関西圏の2カ所で推進し、それをNACSISのデータベース・システムなどにリンクさせ、また韓国や米国などの関連データベースとも提携させることが喫緊である。そして国内では有機的な相互貸借などのネットワーク体制を育成し、発展させることが課題である。こうした仕事には専門人材が不可欠である。ハンゲル関係の専門図書館員を育成するために、国際交流基金の現地事務所などに図書館員を継続派遣し、韓国図書館界などとも相互の出向制度などを確立させることが大事である。

現代韓国、朝鮮関係の資料情報基盤の立て直し、拠点化図書館構想などに関して、本学会などの積極的な提言を期待したい。